

所長に就任して

深澤俊昭

センター改組の問題

センターの議事録を過去にさかのぼって読んでみた。一つの大きな変化が、所長選挙方法の変更あたりから始まっているのに気づく。平成5年度以来、所長選挙は、自薦・他薦を含む立候補制によって行われるようになった。これは何らかの変化・変革を求める声に呼応したものとも思われ、前山口建治所長は、就任以来4年間、センターの改組(分離・分割)、規程の改正(所員の資格)を強く主張してきた。教育関係(主に視聴覚関係)の仕事が肥大化して研究関係の仕事を圧迫しておりこのままでは研究・教育の業務を「二つながらうまくかみあわせて遂行するのは至難の業である」(NEWS LETTER, No. 15)、というのがセンター改組及び規程の改定の理由であった。主張の実現を果たせず4年間の活動を終えることになり残念なことであつたろうと推測される。そのあたりの事情はいまひとつ明らかではないが、改組も規程の改定も何らかの事情によって極めて困難であったということであろう。何よりも所員のサポートを得られなかった事が大きな理由であろうが、気の毒な事情と思われることが一つある。任期2年目の後半あたりから3年目、4年目にかけて、研究関係と教育関係(特に視聴覚関係)の分離・分割という氏の改組の趣旨そのものに結果的には真向から対立することになる、新たな視聴覚施設の

導入・設置の仕事をセンターとして行うことになってしまったことである。この仕事に多大な時間とエネルギーを注ぐことになり、必然的にセンター改組・規程の改定の仕事が進まなかった?とも考えられるからである。斯くしてセンターの組織は従来と変わらないまま、視聴覚関係の比重を一層高めるマルチメディア言語教育ラボ及びその関連施設が設置され、それを置き土産として所長の任務を終えた。

この当然の結果として今期視聴覚関連の仕事が飛躍的に増大した。そしてこの状態は今後も変わることなく続くであろう。しかし、であるからといって、私自身はセンターの改組が絶対的に必要であるという立場にはない。結論的に言えば、やり方によっては今のままで十分バランスを取っていく事が可能ではないかと思っている。というのは、一つには気になる事として改組思考の背景にセンター(の現場)に対する不満が存在しその不満を分離・分割というかたちでの改組によって切り崩したいとの思いが見られることである。この事は過去四年間のニューズレターにセンターバッシングに似た様相をもって示されている。しかしこの種的不满は組織上の問題とは直接関係なく、所長並びに運営委員が必要な措置を適切に講じていくことによって十分解決出来るのではないかと思えるのである。更に、外国語研究センターの時

代より受け継いできた研究機関と教育機関の二つの機能を出来ることなら残していったほうが良いのではないかという思いがある。それは言語研究にあっては、理論言語学の分野のみならず、研究と教育とが相互に関連しあう応用言語学（ここでは視聴覚機器が利用される事も多い）、そしてコンピューターを使用しての言語学（Computational Linguistics）等々その分野も多岐にわたっており、昔はいざ知らず現代にあっては研究関係、教育関係、（そして視聴覚関係、コンピューター関係等）を完全に切り離すことは難しく又、望ましいことでもないという思いがあるからである。例えば教材の開発・作成等は従来軽んじられてきたがこれはまさに研究・教育（視聴覚・コンピューター）の融合のよい例であろう。研究と教育の二分割（dichotomy）は既に過去のものとなっているのである。しかしいずれにせよこの問題は軽々に結論を出さず今迄の経過にも鑑み今後のセンターの活動を通じてあらためて色々な面からじっくりと検討して行く必要があると考えている。

マルチメディアラボ設置の問題点

マルチメディア言語教育ラボ並びにその関連施設に関しては、所長就任が決まった本年1月以來今日に至るまで多くの問題が投げ掛けられてきた。所員の間に何かすっきりしないものが漂い尾を引いており、それが運営委員会の会議でのいくつかの発言にもつながっていった。このようなもやもやをいつまでも漂わせておくのはセンターの今後の活動にとって望ましいことではなく、そこで思い切ってここでその総括をしてこれに関する問題に区切りをつけたいと考えた。以下私の知りえた事実に基づき、問題点を洗い出し、現在の活動の根拠及び今後の活動の指針としたい。

問題は、誰が・どのような資格で・いつ・どこで・どのような過程を経て諸施設の計画を作り、かつそこに容れるべき機器・ソフト等の種類を決定したのかということである（運営委員会での発言）。端的に言うならば、言語研究センターが莫大な費用を使って設置したこのラボが、果たしてセンターの正式な会議での審議・承認を経て決定されていったのかという疑問である。この疑問が

出されたのは故なきことではない。計画から完成に至るまで所員に提供された情報が極めて限られていたからである。議事録を読んで判ったことは、平成6年（1994年）9月28日開催の運営委員会より平成9年（1997年）1月8日の運営委員会迄都合20回の運営委員会が開かれたが、その中でマルチメディアラボに関しては「マルチメディアラボの設置申請について」、「マルチメディアラボについて」として議題に乗ったのが3回だけであったこと（平成7年／1995年1月25日、3月9日、4月19日）、しかもこの3回の運営委員会を含め、すべての運営委員会（平成8年6月19日の議事録メモを除く）に議事録が作成されていないということである。所員に対しては平成7年5月10日の所員会議で設置申請を行う旨の報告、平成8年5月29日の所員会議でラボが実現した旨の報告がなされた。言語研究センター規程第9条は「（運営）委員会は、運営委員総数の過半数の出席により成立する。議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。」旨規定している。議事録が作成されていないため、ラボの計画及びその具体的な内容が規程に則り委員会で審議され承認されたか否かは判然としない。しかし上記の状況からは（そして他の文書及び当時の運営委員会の審議内容を耳にした限りでは）正当な手続きを踏んで物事が決定されたとは言えないといってよいであろう。即ち運営委員会を離れたところで事が進められていたと考えられることである。これは違法といってもよく極めて遺憾なことであり、この違法性にこそ所員が疑義を挟んだのだといえるであろう。しかしながら実際にはあれだけの仕事を限られた期間内で実現するための方法としては正規な手続きにこだわってはいられず、とにかく出来る人間に任せる以外方法が無かったということであろうか。同情すべき余地が無い訳ではないが、しかし労は多としたうえでなお、公的な組織はやはりそうであってはならないというべきであろう。公私混同への道を開かないためにも、デュープロセス（正当な手続き）と情報の公開は組織の柱であるからである。

このようなことを踏まえ、私は4月以來、あらゆる議題を運営委員会の場で取り扱いそこでの審

議・承認を経たうえで業務を遂行してきている。又、所員への情報提供の重大さを思い、第1回の所員会議で表明したように、運営委員会での審議内容等を議事録とは別に運営委員会報告として所員に提供してきており今後もこの姿勢を堅持していくつもりである。マルチメディアラボとその関連施設に関しては、手続きに違法性の影を伴うとはいえず現実に設置されている以上は出来たものは出来たものとして大事に扱い、最大限かつ公正な活用を図っていくべきであり、この考えに則り有効利用のための方策を4月以来探り続けてきている。4月以来運営委員会で審議し決定し所員に報告してきた内容の多くはまさにこの活用のための方策であったわけであり、今後もより適切な活用の方策を見出し、いこうと考えている。なお、以上述べたことは決して前任者の批判を目的としたものではない。事実を明らかにしてそれを受け止める事によって所員間に漂っているもやもやを吹き払い、すっきりした気持ちで前へ進んで行く契機にしたいとの思いからである。

センターの活性化

センターの今年度の活動方針に関しては、4月23日の第1回所員会議で表明した通りである（所員会議報告を参照されたい）。今年度はマルチメディアラボという新財産の管理とその有効利用並びにこれを支える人事問題に常時エネルギーを使い続けなければならない年であり、センターの改組・所員資格・運営委員会の構成・所長選挙方法等の問題は検討課題として視野に収めつつ、とにかく当面はセンターのスムーズな運営に力を注いでいこうと考えている。センターは運営委員会での審議を中心に据えて出来得る限りの努力を惜しまずにセンターの活性化を図っていくつもりである。しかしながらセンターの活性化は究極的には所員自身の活性化による以外はない。センターに期待するだけでは他律的活動にならざるを得ず、不平・不満の世界に陥り易い。自らの活性化のエネルギーと成果をセンターに注ぎ込んでいただきたい。勿論ご意見ご批判等はいつでも承る準備があるのでどうぞ連絡をとっていただきたい。協力しあって良いセンターにしていきたいと念ずるものである。

馬上の雄姿

———テリー・シャーウィン先生の思い出

松 山 正 男

福永武彦は小説「草の花」で人は2度死ぬ、最初は肉体の死であるが、その人を知る人がすべて死んだときに第2の本当の死であると言う。あれは6月26日の木曜日の夕方だった。いつものように先生とコーヒーを飲みながら、歓談した。先生は6時から9時までⅡ部の授業があるので、お別れした。ポンコツに近い先生のカーリーナを眺めつつ帰宅した。それが最後の別れになるなどとは夢にも思わなかった。翌日、突然他界された。しかし、今日またお元気な姿と出会っても幽霊とは思わない。先生の死が信じられないのだ。

それでも訃報に接してから2週間は涙を押さえきれなかった。夢にあらわれるのは、流鏑馬の堂々たる馬上の雄姿であり、箱根の合宿の帰路、大学まで楽しくおしゃべりしつつ愛車を運転して大学まで送ってくださった姿であった。よく喧嘩した、しかしそれ以上に仲良く歓談し、共感した。それ故にいまは心に大きな空洞ができた。今はただ共に苦労してきた神奈川大学の英語のカリキュラムや授業の改革をさらに進めてゆくのが先生の遺志を生かす道であると痛感する。ご冥福を祈る。

追悼

シャーウィン先生との話

保崎 則雄

一昨年、Bostonにて在外研究を行っていたときもそれはたしか11月の嵐の朝であった。先日ご自宅で対面したときも嵐が近づいている午後であった。嵐の思い出ばかりが残っている。

あのときは、たまたま米国に滞在していたシャーウィン先生が Rhode Island 州の Providence から Boston の我が家を訪れた。夕食時には、小学校5年の息子とずいぶん話しが合い、流鏑馬を始めたいきさつ、日本に着たころのこと、盛岡でのようすなどを楽しく語っていたことを鮮明に想い出す。その夜は、翌朝一番の飛行機に乗り遅れるといけないということで、夜通しあれやこれや、とりとめもないことを話した。途中、互いにうつ

らうつらしながら、薄暗い部屋で、神大の行く末、MITのこと、研究のこと、昔の彼女のこと、実にさまざまなことが話題になった。それも今や思い出になってしまった。

振り返って7年間、会議以外でもよく議論をした。私は彼と2人で話すときは、英語と決めていた。最初に大学で会ったときに、そうすると彼に言ったら、“That’s a good habit.” とかなんとか言っていたような記憶がある。今までいろいろな妥協もあったし、賛同もあった。そんな仲間が突然居なくなってしまった。生きている者の傲慢であるが、困ったことであり、無念である。また、よい友人関係が、過去形になってしまった。

メディア教育を実践しつつ学ぶこと

保崎 則雄

ゼミで各自のプロモーションビデオを制作させている。目的は、いくつかある。メディアに慣れ親しむ、自己をみつめ表現する、映像作品の企画／制作／編集／評価というサイクルを実証的に学ぶことなどである。5月の富士見での合宿で、映像技法（パニング、ドーリー、クレーン、モンタージュなど）、絵コンテ作り、メディアリテラシーについて考え、他国の実践をビデオで見た。また、新設の本学スタジオでは、それに加えてライティング、音声編集のポイントなどを紹介し、作業を進めている。私自身、学生部生時代8ミリ

映画制作を趣味で行っており、米国での院生時代は、映画学科で制作／編集、映画理論などいくつか授業をとったこともあり、その面白さ、難しさは実感できる。

さて、7月現在で12人のゼミ生のうち、約3分の2のものが完成した。初めての体験ゆえ、編集、表現にぎこちなさはあちこちあるが、とにかく30秒という制約の中で、どれだけ自分を表現するか、かなり苦労したようである。もっともそれが学習目標の一つであるのだが。

文章による表現（狭義のリテラシー）では、か

なり時間をかけられてきている彼等である。残念ながら映像／音声でのリテラシー（活用、批判能力）では、まったく訓練が欠けている。ところが、上達は実に速い。40代の私などは、いつも導入時に必要なだけである。また、そのように追いつかれるのが楽しいし、そういう彼等をたくましくも感ずる。秋からは、デジタルカメラなども駆使して、ちょっと違った、意味のあるホームページなども制作しようと考えている。法規制（実は私は法学部の出身である）、デジタル情報の氾濫と反乱、表現／発信の自由、教育との関わり、英語との問題、プレゼン方法などを、感性には優れているが、じっくりと考え伝えることがあまり得意でない彼等と一緒にたのしむ魂胆である。担当者としての私は、常に一步先でリードできるよう努力していかねば。そして、願わくば、もう少しこういった分野の科目を実践する人間を学生は望んでいるという現実を、より多くの大学関係者が自覚して欲しいのだが。

最後に、これらのことを効果的に実践するためには、時間的、空間的に大学が学生に開かれていることが前提である。管理という名の束縛、失敗を恐れる常識論、本当に必要な設備／人材の設置、育成などなど、大人が次世代の人間の形成に深くかかわることから逃げているのではないかという心配を神戸の出来事からも痛感する。そして同時にその実践の中で、道徳、規範、規則、法をしっかりと教えていくべきであろう。野放図はいけな。しかし、過度な干渉は、さらに若者の伸びる芽を摘みとってしまう。

素晴らしい文学作品に人間が感動するように、素晴らしい映像、音、芸術的／工学的作品、そして自然そのものに、我々は同様に感動することを忘れないでいたいものである。

このニューズレターが、紙に文字印刷であるという考え方も、再考してもいい時代ではなからうか。

新発見？ General English

— イギリスでの在外研究の余禄 —

橋 本 光 憲

'96年4月から一年間、イギリスのノッティンガム大学で在外研究をする機会に恵まれた。テーマは「銀行経営の国際比較」であり、英語の方は滞在中に受け身で吸収できるものがあればいいと言った構えであった。前者の方は、たまたま大学院のMBAコースで後期後半 Japanese Finance を教えて呉れということになり、1～3月はこれに忙殺されてしまった。これも在外研究の余禄と云えば言えるかも知れない。今回ご報告したいのは、もう一つの余禄、後者の英語の方である。

私は、銀行論、外国為替論と併せてビジネス英語を教えている。英語としては、ESP (English for Specific Purposes. 分野別英語、Special

English) の一つ、金融英語に興味を持っている。そこで、ESPと対比するものとして、General English (GE、一般英語) とは何ぞやということに疑問を持っていた。特に、ここ数年間、国際教育委員長として自らも学生を引率して英語圏での研修に立ち会い、疑問は深まる一方であった。それもあって、本来の研究の合間を縫って、「General English 再考 — 海外英語研修の側面から」を纏めた。（『神奈川大学言語研究』第19号掲載）更に研究を続けて「General English の一考察 — Business English, Special English との比較において」を発表した。（神奈川大学経営学部『国際経営フォーラム』第8号）

そんなことで本来の研究がおろそかになってしまった嫌い無きにしも非ずだが、調査の結論を一言で申し上げると、「今日、General Englishという言葉がまともに使われているのは、英国における外国人向けの短期英語研修においてであろう。同種のを米国では、一般にIntensive English trainingと称している。」ということである。日本では、General Englishを簡単に（厳しくいえば、安易に）一般英語という言葉に置き換えて使っている。こういうと、皆さん「何を非常識なことを言ってるんだ」と怒られるかも知れない。しかし、英国で小・中学生に教えている英語（国語）はGEではなくて、Standard Englishなのである。

英国の図書館などでGEについて調べると、出てくる本は只一つ、General English Syllabus Design (1984) であり、古い本ではGeneral and Business English (1952) 程度である。その内容についてはここでは省くが、要するに参考になる文献は無きに等しいということである。内外の専門辞典類でも一切記述がなく、General Englishという言葉はいわば「俗語」なのである。私は、これを「新発見」と自称しているのだが、皆さんにはお認め頂けるだろうか。なお、僅かにESPの世界で、SEに対比する形でEnglish for General Purposes (略してGeneral English) という表現が定着しつつあるのが現状であろう。

「うそ」はどこから来たか？

— 語源は中国語の「胡説」か —

山口 建治

中世のこの列島に薬を売り歩いた唐人の集団がいたという日本史研究者の指摘を承けて、小田原の透頂香を日本に伝えたといわれている外郎（ういろう）のことを調べて論文にしたことがある。そのとき、薬を売り歩いた唐人は自分たちを「薬師」（やし）と自称したのではないかと思いついた。「やし」は今日「香具師」と書くのが普通だが、本来は中国語の「薬師」の発音をそのままうつしとった言葉であろうと考えたわけである。「やくし」が訛ったり、つまったりして「やし」になったと説明する人がいるが、そうではなく最初から「やし」という音で日本語のなかに入ってきたのである。

その後もいろいろ調べていると面白いことに気づいた。それは「やし」同様、語源不明とされている日本語のなかに、当時の中国語（とくにその俗語）が、そのまま日本語の世界に紛れ込んで、その後、唐音（中国語）だという認識が薄れて、適当な漢字が当てられてしまったために素性がわからなくなった言葉があることに気づいた。そういう言葉が「やし」以外にもまだまだいくつもありそうなのだが、最大級のものが「うそ」という

言葉である。

まるでうそのような話なのだが、「うそ」の語源は中国語の「胡説」だと考えられる。小学館の『日本国語大辞典』の「うそ」の項には、その語源として十一もの説が列挙されているが、私にはどれも苦し紛れの牽強附会に見える。ここでそれらの説をいちいちとりあげ批判する余裕はないが、中国語の「胡説」が語源であるとさえいえば、こじつけの説明はしないで済むのである。「胡説」は「根拠や道理もなくみだりにいう」（『漢語大辞典』）ことであり、その音も中国の南方方言で発音すれば、「うそ」ときわめて近い音になるはずである（ちなみに、今日の杭州音では[ɦusuaʔ]となる）。今日では「うそ」は「嘘」という字を当てて書くのが普通だが、漢字の「嘘」の字は「息を吐く」という意味であり、一般の漢和辞典にも書いてあるように、日本人がその字形からかってに「うそ」の意味を持たせて使うようになっただけなのだ。このように「うそ」の語源を発見したぞと、ひとり悦に入っているのだが、これがまっかな「うそ」だったりして……。